倫風宏話

自主的・自発的な実践を

上廣榮治

暑い夏がまたやってきました。この季節になると思い出されるのが、やはりあの終戦当時の日々のことであり、あの日以来の日本人の来し方です。

今年は日英同盟案が元老会議で可決されてから、ちょうど百年目にあたります。そして翌年、日本は初めて欧米列強との対等な同盟を結んだのです。当時のイギリスはその繁栄に翳りが見えはじめたとはいえ、世界中に海軍の拠点と植民地を持つ文字通りの超大国。それが、近代国家を発足させてからわずか三十年そこそこの、大人と子どもほどにも国力の違う弱小国と「対等」の同盟を結んだのです。当時のイギリスの堂々たる大人ぶりに感心させられる一事です。

かつてのイギリスでは、子どもに向かって「君は悪い子だ」というときに、“You are no better than you ought to be.”と言うのが普通だったと知って、感心したことがあります。

“you ought to be”つまり「君のあるべき姿」に比べると、今の君にはよりよいところがない、そう言っているのです。たとえ子どもに対しても、「悪い」とか「善い」という大人の側の判断を一方的に押しつけない表現です。この言葉の裏には、子どもにも「自主的に」自分の「あるべき姿」を探し求める能

力があるという認識があります。

こう言われた子どもがどうするか。それは子どもの自由です。しかし、その子どもは、非を悟って自らの言動を正すはずだという信頼感が下敷きになっています。常に相手の「自主的な判断」と「独立した人格」を重んじる。我と人とを、「対等」の能力と尊厳を有するものと見るのが基本的な礼儀になっている。そうした社会においてはじめて、このような言い回しが発達したのだと思います。

一方、わが国はといえば、この点では現在に至ってもまだ、我も人もの自主独立を尊重する文化を獲得していないのではないかと思われてなりません。

戦後になって、個人の自由や権利が声高に言われるようになっても、自分と相手の、双方の自主独立を重んじることができずに、ただ利己的な「自分勝手主義」だけが横行してきました。

また、真の自主独立には「責任」がともないます。しかし、「上の命令だったからしかたがなかった」という言い訳で戦争責任を回避した指揮官たちと同じように、バブル崩壊や護送船団方式の破綻で責任を取った官僚や経営者の話は聞きません。指導者だけではありません。この、責任を負いたくないという風潮は一般人にも及んでおり、無闇に人に媚びたり、上の指示を仰ぎたがる態度にもなっています。

韓国の笑い話に、こうした自主性のない日本人が登場します。タイタニック号が氷山にぶつかって沈みつつある。救命ボートにはわずかな人数しか乗れません。自発的に沈む船に残らせるために何と言ったら納得するか、というのです。もし、それが韓国人であれば「オモニ（母親）が残れと言っている」と言えば船に残るというのです。母親の力が非常に強いお国柄だということです。では、日本人の場合にはというと、「本社の承認は得ているぞ」なのです。

日本人サラリーマンとは、何一つ自分で決めることができず、自分一身の身の振り方まで本社の指示

を仰がなければならない存在だと見られているのです。残念ながら、そうした面がないとは言えないように思われます。サラリーマンに限らず、私たちはとかく上の指示を求めたがります。そしていったん指示があると、四角四面にこれを守り、自分の部下にもその指示を四角四面に押しつけます。自発的に、自主的にものを考え、行動し、責任を取ろうという発想はありません。トラブルが生じると、指示に従っただけだと言って、責任を逃れようとしがちです。

しかし、指示を求めたのも、指示通りに事を行なったのも自分なのです。とすれば、自分の責任は免れないはずです。しかし不思議なことに、ほとんどの人がこうした場合に責任を感じることはありません。

ところで私が気になるのは、わが会の「ハイの実践」も、こうした日本人の傾向によって歪められてはいないだろうかということです。つまり、目上の言うことは「ハイ」で受けるということが、何でも目上の指示によるという指示待ちの風潮を生み、自主性や自発性をなくしてしまってはいないかということです。

しかし、朝の誓を思い出して下さい。終始「〜します」「〜しません」と一人一人が誓います。独立した個人が「自主的に」かく生きると決意しましたと誓うのです。このことからも明らかなように、わが会は会友一人一人の「自発的な意志」、より善く生きようとする志に最も重きを置いているのです。一人一人が、己の「あるべき姿」を真剣に探し求め、日々の実践によって「あるべき自分」を実現する。自分の意志と責任で、自分のために実践する。それがわが会なのです。

では、そうしたわが会において、なぜ「ハイの実践」なのかと言えば、言うまでもなく、まず第一にそれは「長幼の序」の教えです。第二は、それが我と人との「あるべき姿」を発見する最良の方法だか

らです。どんなこと、どんな相手に対しても、最初から自分の狭い判断で否定し、道を閉ざすのではなく、肯定的に「ハイ」と受けとめて、事を前へ前へと進めていこうということです。「ハイ」と応じて、そこから「あるべき姿」を探すのです。「あるべき姿」に気づいたら、そのように「あるべく」実践に入るのです。つまり、「ハイの実践」とは、「現実大肯定」の一つの形でもあるのです。

実践倫理の「ハイ」は、上の指示に唯々諾々と従うことでも、迎合することでも、ましてや指示待ちにつながるものでもありません。自ら物事の「あるべき姿」を求めて実践する、そのために自ら欲して「ハイ」というのです。言ってみれば、それは自主と独立の積極的な「ハイ」なのです。

「好きこそものの上手なれ」と申します。およそ何事であれ、自主的な希望、自発的な意志によるのでない限り、よい結果には結びつきません。是非こうしよう、是非こうしたいと願ってはじめて、成就に向けての一歩一歩が喜びとなり、実になるのです。私はこうありたい、私たちはかくあろうという、一人一人の「あるべき姿」があってこそ、そこへ向けての日々の実践が喜びとなるのです。

とすれば、自主的に、自ら望み希望する「目標」を定めることが、喜びのある真の実践への第一歩であるということがわかります。会友一人一人も、あるいはそれぞれの会場においても、それぞれが「自主的な目標」を持っているかどうかによって、その実践には大きな違いが生じるはずです。

自主的な目標を持っている会友や会場は一目でわかるものです。その実践が生き生きとした、喜びに満ちたものであるからです。自ら欲し、自ら行なうものの尊厳と美に満ちているのです。

会友も、会場も、自発的な目標に向かって自主的に実践する。それでこそ老幹にも新しい枝が芽吹くのです。

果たしてあなたには「あなたのあるべき姿」は見えているでしょうか。